

# 全国調査から見える 外来牧草の現状と課題

---

(公財)日本自然保護協会  
高川 晋一



日本自然保護協会  
THE NATURE CONSERVATION SOCIETY OF JAPAN

# 日本自然保護協会とは



辺野古・大浦湾の  
保護活動（沖縄）



中池見湿地の  
北陸新幹線問題（福井）

守る

モニタリングサイト1000  
里地調査



調べる



東日本海岸植物群落調査

広げる



自然観察指導員



自然しらべ



創立 **63** 年目となる「自然保護NGO」  
会員・サポーター27,000人

暮らしを支える  
「自然の豊かさ」を守り、  
自然を尊重する社会づくりを  
目指します。

英語で“The Nature Conservation Society of Japan” 略して「NACS-J（なつくす・じえい）」

# 市民による全国調査

## ■ モニタリングサイト1000里地調査

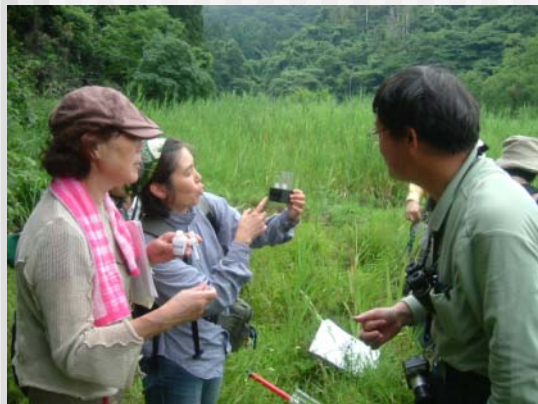
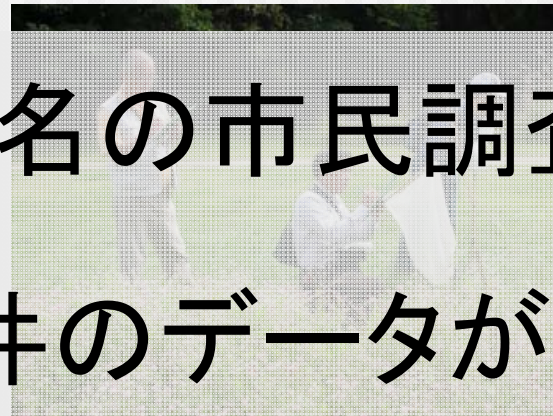
- 環境省との共同事業
- 100年目指して約200カ所で調査
- 9項目の調査: 植物相、鳥類、チョウ類...





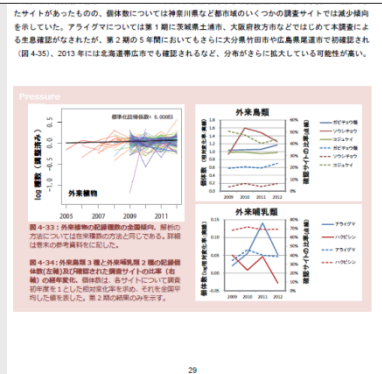


・2,500名の市民調査員が参加  
・90万件のデータが集まった！

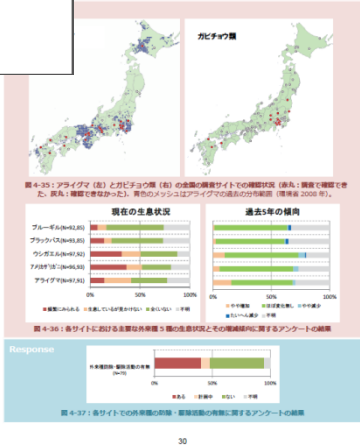




# 全国レポートの発行（2014年）



は、調査サイトの48.5%で実施されており、進捗が行われていることがわかった(図4-36)。アライグマの調査は、アメリカザリガニ、ブラックバス、ブルーギル、生息密度が減少したサイトもわずかながら確認できた(図4-36)。分布拡大や個体数の増大に伴う在来種系への影響については、第2期までの調査ができていなかった。アライグマが過去5年で急増した大規模のサイトにおいてアライグマの増加に関連していると思われる顕著な変化は認められなかった。今後在来種系を維持する適切な管理を講ずることが重要である。

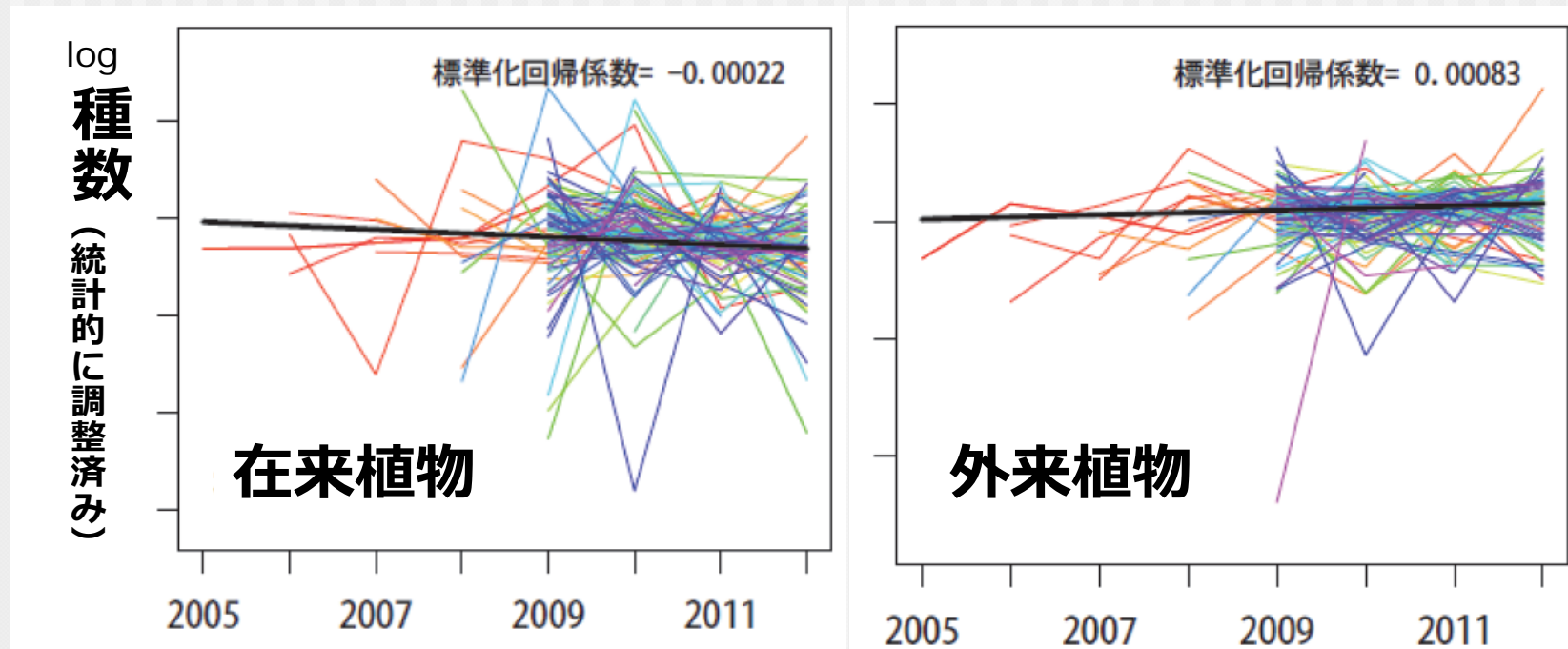


## 全国調査の結果を総合的にとりまとめた



- 様々な在来種数が減少
- ノウサギやキツネ・テンの個体密度が減少
- ゲンジホタル・カヤネズミが全国的に減少
- 保全活動の成果のあった場所もある

# 外来植物の変化傾向



## ■ 調査地110か所での全国傾向

- 在来植物は**減少**、外来植物は**増加**

## ■ イネ科植物の**26%**が外来種

- カモガヤ、オニウシノケグサ、ネズミムギ、コヌカグサ等

# 調査サイトの実例：小清水原生花園



古くから放牧に利用



放牧衰退 & 機関車廃止



外来牧草の優占により、  
在来種衰退。景観劣化



「風景回復対策協議会」  
による野焼きの開始



- ・順応的管理により保全
- ・風景が回復



# 調査サイトの実例：



素晴らしい里山(ホットスポット)でも

- 農道整備

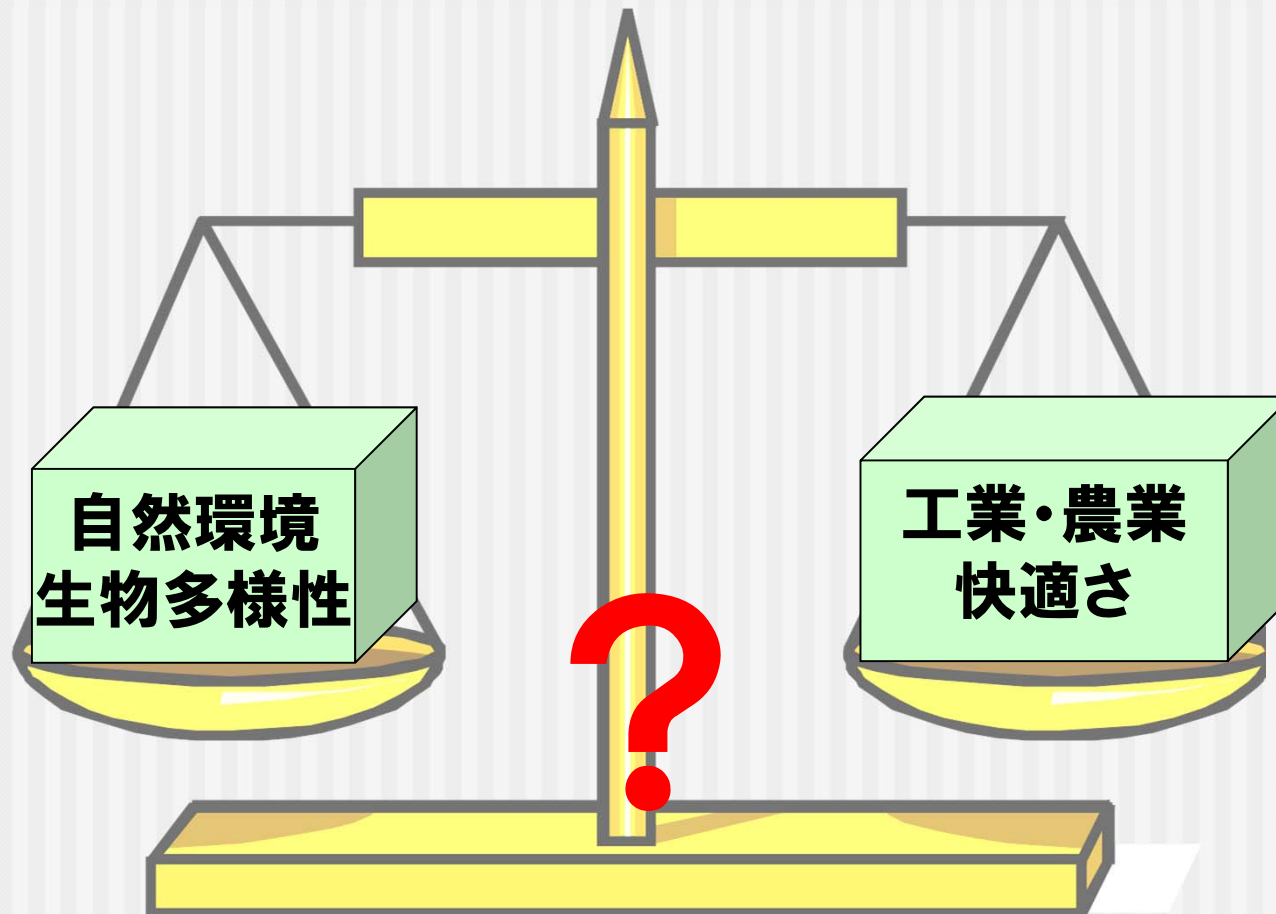
- 外来牧草の吹き付け。新たな外来種の持ち込み

- 放棄水田の牧草地への転作

- 外来牧草の移出。肥料過多による池の富栄養化



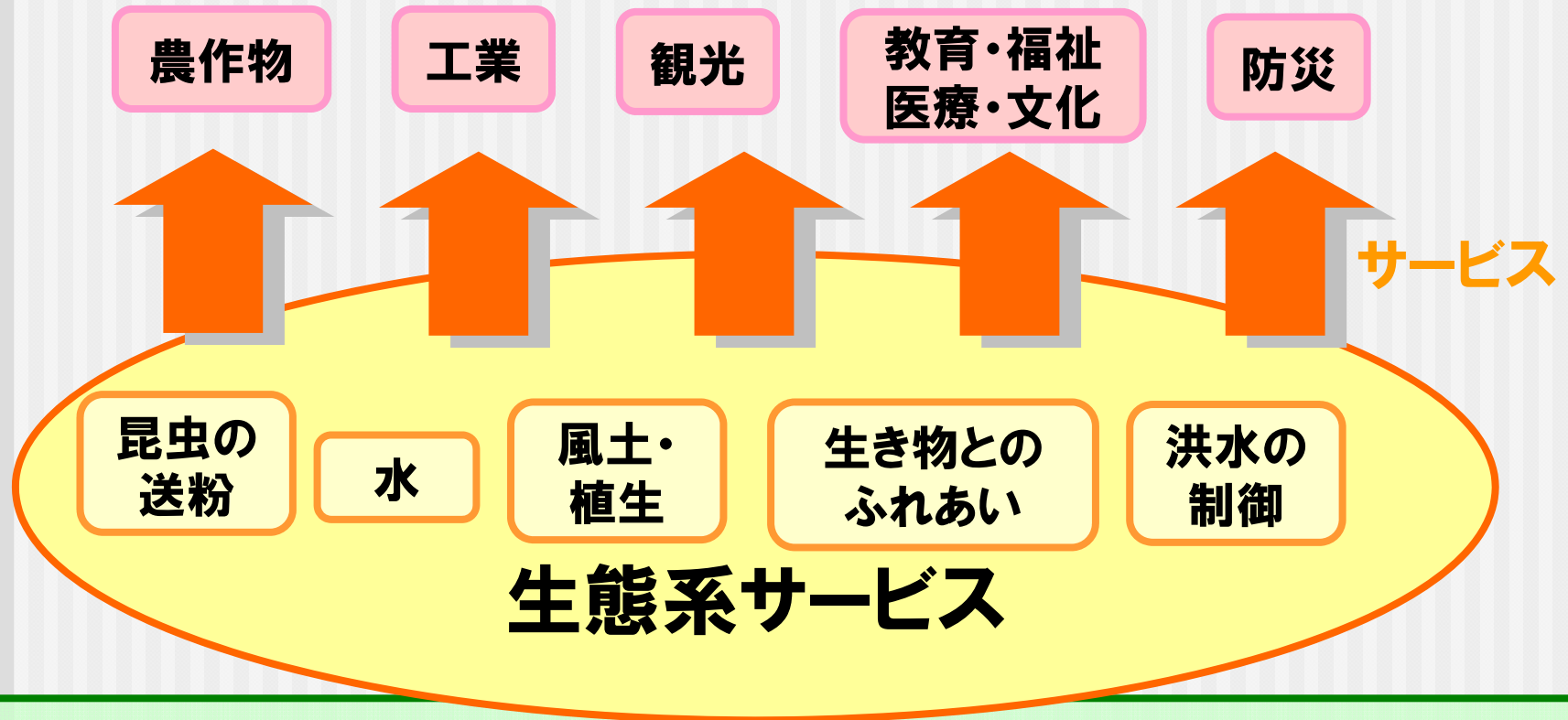
あなたはどっち？



そもそも天秤にかけるもの？

# 暮らしを支える生物多様性

## 豊かで安全な人の暮らし



生物多様性



# 気づかれにくい「自然の恵み」の価値

トマトやカボチャの授粉には昆虫の手助けが重要

砂浜やマングローブ林が津波被害を抑制

森林はヒートアイランド抑制やアメニティにとって重要



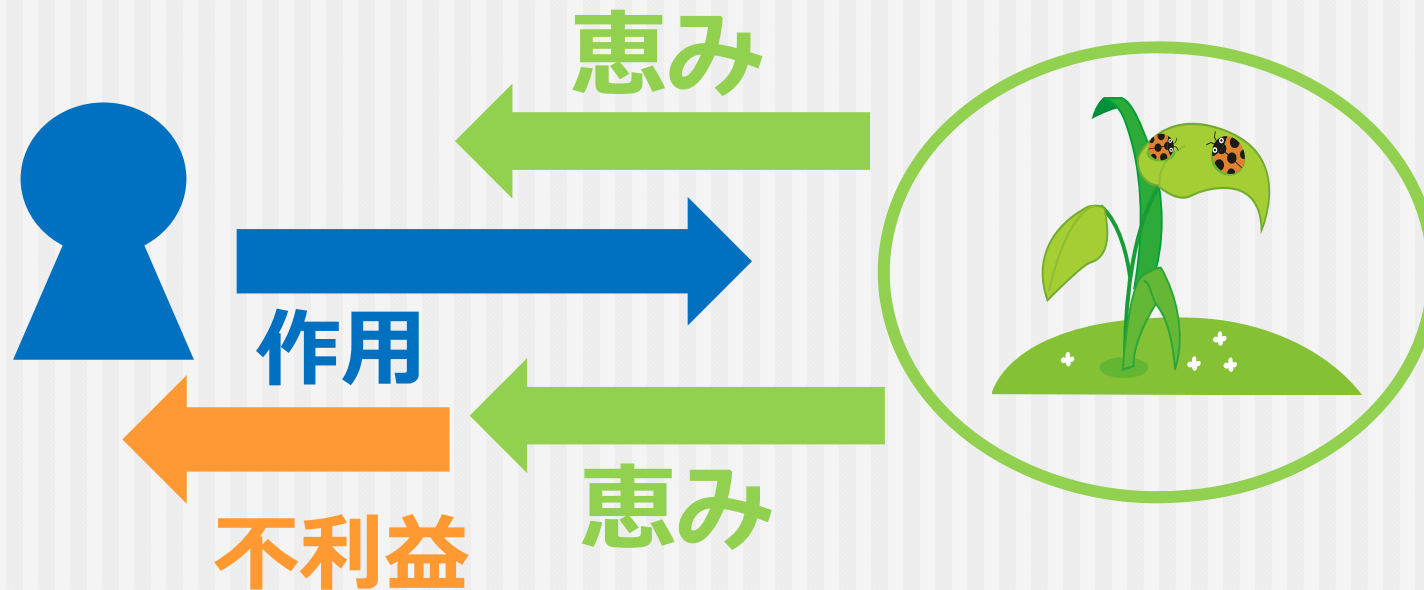
ニューヨークには浄水場が無い。すべて天然水

医薬品の多くはもともと野生植物に由来

森や水辺が残っている街は地価が高い

新幹線のパンタグラフはフクロウの羽を真似た

# 生態系サービスのトレードオフ



- 生態系サービスの価値・変化に気づけないことも
- サービスの価値が、状況により大きく変化する
- 代替品やゾーニングで回避可能？  
⇒ 難しい。予測困難、制御困難、**絶滅の不可逆性**



# 受益者・被害者の不一致



# 果たして「保全」は損なのか？

SUNTORY

サントリーグループ  
CSRレポート  
2014



## ① “2050年のあるべき姿”

「自然環境の保全・再生」と「環境負荷低減」の2つの軸で2020年目標を設定しました。

### 自然環境の保全・再生

生物多様性の象徴である野鳥の保護活動をグローバルに展開

- ・国内すべての「天然水の森」において、フシ・タカ類の産巣・子育てを支援
- ・海外における野鳥保護活動の支援

「天然水の森」の面積を12,000haに拡大

- ・国内の自社工場で使用する地下水量を育苗面積の2倍に拡大



理念  
自然と  
あう

### 2020年 目標

サントリーグループ<sup>※1</sup>の自社工場での水使用を35%削減<sup>※2</sup>

サントリーグループ<sup>※1</sup>のバリューチェーン全体のCO<sub>2</sub>排出を24%削減<sup>※2</sup>

※1: サントリーグループ売上高(2012年)の80%以上を占める事業会社群(海外を含む)  
※2: 2010年における事業領域を前提とした基準単位での削減

### 環境負荷低減



を実現していくために

### 自然保護の グローバルトップランナー

主要な事業展開国における自然環境保全・再生への積極的な取り組み

挑戦  
1

### 2050年 環境ビジョン2050

サントリーグループは、自然の恵みに支えられている企業の責務として「自然環境の保全・再生」「環境負荷低減」を柱に、持続可能な地球環境を次代へ引き渡すことを目的に、2050年に向け、2つの挑戦を開始します。

### グローバルでの環境負荷半減

事業活動における環境負荷(自社工場での水使用、バリューチェーン全体のCO<sub>2</sub>排出)を2050年までに半減<sup>※1</sup>

挑戦  
2

### の未来を見据えて目標を明確化

Kの恵みをお届けする一方で、美しく清らかな水を使い、きれいに自然に還すことは、私たちの責務です。その水で育まれる植物や森林、川・海・大気、そして生き物が創り出す生態系という豊穡らしい循環、すなわち地球環境そのものが、私たちサントリーグループの経営基盤です。サントリーグループは、自然の恵みに支えられている企業の責務として環境経営を推進し、「天然水の森」での水源保護活動や、工場での節水・省エネ、資材包装の軽量化

などさまざまな活動を続けています。2014年1月、サントリーグループの環境経営により明確な方向性を与えるため、2050年に向けた「サントリー環境ビジョン2050」を策定するとともに、「2020年目標」を設定しました。「自然環境の保全・再生」と「環境負荷低減」の2つの軸でグローバルに環境経営を推進し、企業理念「人と自然とあう」の実現を目指します。

### ステークホルダー・ダイアログ

「天然水の森」を実際に歩いて、その素晴らしさを体感できました。



「環境ビジョン2050」についての意見交換に先立ち、「天然水の森」での水源保護活動を体感しました。生物多様性保全の分野でも優れた取り組みとして知られており、実際に森を歩いてみて、「天然水の森」にかかる思いを地域の方々と一緒に実現していくという熱意が伝わってきて、本当に素晴らしい取り組みだと感じました。こういった素晴らしい取り組みをサントリーだけでなく、社会全体に広げていくこと、海外でも高いレベルの取り組みに挑戦していただくことを期待します。環境負荷低減に関しては、地球環境の状況を把握した上で、グローバルでもトップランナーを標榜できるように高い目標に挑戦していただきたいと思います。



エグゼクティブ・ディレクター  
代表取締役  
日比保典氏

※詳細はWebサイト <http://www.suntory.co.jp/company/csr/dialogue/2014/environment/>

コンプライアンス

ビジネスチャンス

操業の持続性